悶悶日記

太宰治

月　日。

郵便受箱に、生きている蛇（へび）を投げ入れていった人がある。憤怒。日に二十度、わが家の郵便受箱を覗（のぞ）き込む売れない作家を、嘲（あざけ）っている人の為（な）せる仕業にちがいない。気色あしくなり、終日、臥床。

月　日。

苦悩を売物にするな、と知人よりの書簡あり。

月　日。

工合いわるし。血痰しきり。ふるさとへ告げやれど

も、信じて呉（く）れない様子である。

庭の隅、桃の花が咲いた。

月　日。

百五十万の遺産があったという。いまは、いくらあるか、かいもく、知れず。八年前、除籍された。実兄の情に依（よ）り、きょうまで生きて来た。これから、どうする？　自分で生活費を稼ごうなど、ゆめにも思うたことなし。このままなら、死ぬよりほかに路がない。この日、濁ったことをしたので、ざまを見ろ、文章のきたなさ下手（へた）くそ。

檀一雄氏来訪。檀氏より四十円を借りる。

月　日。

短篇集「晩年」の校正。この短篇集でお仕舞いになるのではないかしらと、ふと思う。それにきまっている。

月　日。

この一年間、私に就いての悪口を言わなかった人は、三人？　もっと少ない？　まさか？

月　日。

姉の手紙。

「只今、金二十円送りましたから受け取って下さい。何時(いつ)も御金のさいそくで私もほんとに困って居ります。母にも言うにゆわれないし、私の所からばかりなのですから、ほんとうにこまって居ります。母も金の方は自由でないのです。（中略。）御金は粗末にせずにしんぼうして使わないといけません。今では少しでも雑誌社の方から、もらって居るでしょう。あまり、人をあてにせずに一所けんめいしんぼうしなさい。何でも気をつけてやりなさい。からだに気をつけて、友だちに

あまり附き合ない様にしたほうが良いでしょう。皆に少しでも安心させる様にしなさい。（後略。）」

月　日。

終日、うつら、うつら、うつら。不眠が、はじまった。二夜。今宵、ねむらなければ、三夜。

月　日。

あかつき、医師のもとへ行く細道。きっと田中氏の歌を思い出す。このみちを泣きつつわれの行きしこと、わが忘れなば誰か知るらむ。医師に強要して、モルヒ

ネを用う。

ひるさがり眼がさめて、青葉のひかり、心もとなく、かなしかった。丈夫になろうと思いました。

月　日。

恥かしくて恥かしくてたまらぬことの、そのまんまんなかを、家人は、むぞうさに、言い刺した。飛びあがった。下駄はいて線路！　一瞬間、仁王立ち。七輪（しちりん）蹴（け）った。バケツ蹴飛ばした。四畳半に来て、鉄びん障子（しょうじ）に。障子のガラスが音たてた。ちゃぶ台蹴った。壁に醤油。茶わんと皿。私の身がわりになったのだ。

これだけ、こわさなければ、私は生きて居れなかった。後悔なし。

月　日。

五尺七寸の毛むくじゃら。含羞（がんしゅう）のために死す。そんな文句を思い浮べ、ひとりでくすくす笑った。

月　日。

山岸外史氏来訪。四面そ歌だね、と私が言うと、いや、二面そ歌くらいだ、と訂正した。美しく笑っていた。

月　日。

語らざれば、うれい無きに似たり、とか。ぜひとも、聞いてもらいたいことがあります。いや、もういいのです。ただ、――ゆうべ、一円五十銭のことで、三時間も家人と言い争いいたしました。残念でなりません。

月　日。

夜、ひとりで便所へ行けない。うしろに、あたまの小さい、白ゆかたを着た細長い十五六の男の児が立っている。いまの私にとって、うしろを振りむくことは、

命がけだ。たしかに、あたまの小さい男がいる。山岸外史氏の言うには、それは、私の五、六代まえの人が、語るにしのびざる残忍を行うたからだ、と。そうかも知れない。

月　日。

小説かきあげた。こんなにうれしいものだったかしら。読みかえしてみたら、いいものだ。二三人の友人へ通知。これで、借銭をみんなかえせる。小説の題、「白猿狂乱。」

底本：「太宰治全集10」ちくま文庫、筑摩書房
1989（平成元）年6月27日第1刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房
1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月
初出：「文芸」
1936（昭和11）年6月1日発行
入力：土屋隆
校正：noriko saito
2005年3月17日作成
2006年7月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。